

待兼山俳句会

第六百九十四回 世話人 山田安廣・鈴木輝子・寺岡翠・根来眞知子

東中 亂・向井邦夫・森茉衣

令和六年十一月十八日（月） 会場 大阪俱楽部 会議室 締切 午後二時

出席者 濱戸幹三・山戸暁子・上田恵子・小出堯子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・東中 亂・東野太美子
向井邦夫・森茉衣・山田安廣

投句者 碓井遊子・西條かな子（選句のみ）・寺岡翠・中嶋朱美・中村和江・西川盛雄・根来眞知子
平井瑛三 以上出席者十一名+投句者八名 計十九名

兼題 冬日和・八手の花（幹三） 初時雨・木の葉髪（暁子） 当季雜詠 通じて八句

次回 例会 令和六年十二月十六日（第三月曜日）会場 大阪俱楽部会議室 締切 午後二時

兼題 咳・水鳥（幹三） セーター・冬木立（暁子） その他当季雜詠

選者吟

生國の海荒るる頃初時雨

幹三

本当にめえと鳴く山羊冬日和
男には根深き嫉妬木の葉髪

初時雨淡き青空ありしまま

暁子

初時雨金の産毛の異国人
髪形を如何に変へても木の葉髪

班鳩の小さき塔の受く冬日
ヘルメット着用義務や木の葉髪
◎初時雨金の産毛の異国人
どこまでも歩け吾が脚木の葉髪
ころころと笑ふ声あり花八つ手
裏富士の襞明らかや冬晴れて
尾根越の一気呵成や初時雨
生家今見知らぬ家屋木の葉髪
木の葉髪変はらないねと言はれても
◎日曜はビルに優しき初時雨
◎稽古場に妻を送れば初時雨
冬日和慣れし特注コルセット
読み返す古き日記や冬日和
きつぱりと大樹の陰に花八手
◎晴れた日はぼんぽんはづむ花八つ手
回覧板隣家の庭の花八手
肩に降り拂へど落ちぬ木の葉髪
◎冬うらら機嫌よき子の乳母車
存在の頼りなき日々木の葉髪
振り売りの声のびやかや冬日和

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|----|----|----|-----|----|----|----|-----|----|----|----|-----|----|----|----|-----|----|----|
| 兵十郎 | 暁子 | 輝子 | 安廣 | 兵十郎 | 暁子 | 輝子 |
| 兵十郎 | 暁子 | 輝子 | 安廣 | 兵十郎 | 暁子 | 輝子 |

◎冬日和年寄りばかり昼のバス
堀ぎはの僅かな土に石蕗の花
冬日和阿蘇路にけむり吐く高さ
はや十年母の命日初時雨
遊ばむと生まれし子らよ冬日和
金髪の君も憂ふや木の葉髪
愛犬やうくんと伸びて冬日和
初時雨成すべきことのあれやこれ
◎初時雨淡き青空ありしまま
裏木戸に手とも顔とも花八手

幹三 特選句講評

・ 稽古場に妻を送れば初時雨
邦夫 安廣 亂 翠 亂
太美子 邦夫 安廣 亂 翠 亂
邦夫 安廣 亂 翠 亂
太美子 邦夫 安廣 亂 翠 亂
邦夫 安廣 亂 翠 亂
太美子 眞知子 瑛三 亂 翠 亂
暁子

・ 稽古場に妻を送れば初時雨
霧囲気のある句です。やはり京都・舞踊、そして濡れた石
畳を想像します。古都京都に冬が訪れたのです。

・ 初時雨金の産毛の異国人
初時雨と金の産毛の取り合わせ、本邦初ではないでしょ
うか。外国人観光客も風景に馴染んできたという印象ですね。

よく季語は動くか、という話が持ち上がりますが、この句ではぴったり強固に取り合わされています。

・日曜はビルに優しき初時雨

安廣

確かに「日曜の」とした方が意味は通りやすいですが、原句の魅力が減少したように思えます。茫洋とはしますが「は」の方が日曜のビル街の初時雨のムードを捉えています。

・晴れた日はぽんぽんはづむ花八つ手

太美子

影に咲く目立たぬ花という句が多い中、この句はなんと楽しいことでしょう。弾むようにと直喻にせず、弾むと言いかつたところが魅力です。八手の花を通して冬晴れの爽快さが伝わります。

・冬うらら機嫌よき子の乳母車

太美子

「の」が効いています。こういう乳母車とすれ違うと、こちまで気が晴れ晴れします。その子の笑い声が聞こえてき

そうです。

・冬日和年寄りばかり昼のバス

堯子

一つ前の句と並べると愉快ですね。機嫌よき老人の乗合バス。こういう句を見ると年をとるのも悪くないな、と思います。「昼のバス」もいい仕事をしています。

・初時雨淡き青空ありしまま

暁子

初時雨とはこういうものです。無駄なく淡々と描かれたスケッチのような句なので、余計に厳しい冬の到来が感じられます。「淡き青空」に惹かれました。

暁子 選

山も野も模糊の中なり初時雨

安廣

庭の隅愛でられもせず花八手

堯子

うつし絵のほほゑみは永遠木の葉髪

太美子

花八手実家の庭の主人公

朱美

日曜はビルに優しき初時雨

安廣

長々と十一月の地下通路

幹三

選句用紙に一筋白き木の葉髪

瑛三

裏路地にキックボードや花八手

冬日和慣れし特注コルセット

兵十郎

翠

◎女医米寿カルテは手書き木の葉髪

冬日和庭師に熱き茶を淹るる

恵子

◎晴れた日はぽんぽんはづむ花八つ手

太美子

冬日和庭師に熱き茶を淹るる

輝子

木の葉髪心を決めて八十路へと

和江

田舎菓子作る古民家冬日向

和江

振り売りの声のびやかや冬日和

瑛三

◎冬日和年寄りばかり昼のバス

堯子

金髪の君も憂ふや木の葉髪

乱

弁慶の見栄か睨みか花八手

輝子

◎車夫若し走れ嵐山初時雨

恵子

◎雨やどり事はそこから初時雨

乱

暁子 特選句講評

・女医米寿カルテは手書き木の葉髪

恵子

最近のお医者様は大抵患者よりパソコンを見ておられる場合が多い。この老女医さんは未だに手書きカルテ。

おそらく患者の言葉にも耳を貸して下さっているのだろう

のある句。

・車夫若し走れ嵐山初時雨

輝子

初時雨はこれから到来する厳しい冬の前触れ。やがて

う。段々見られなくなる懐かしい名医を描かれた。

・晴れた日はぽんぽんはづむ花八つ手

太美子

八手の花は一方では侘しく寂しい、目立たないところ

に咲く花として捉えられ、庭隅、裏庭、裏口、裏木戸など

と共に詠まれることが多い。他方では角が沢山突き出た

白くて丸い元気のよい花として捉えられている。この様に印象を真二つにする花は珍しいのではないか。

・冬日和年寄りばかり昼のバス

堯子

この風景は最近よく見かける。朝夕は若い人たちも利用して混むバスも、昼間は老人ばかり。私の住む市ではバスの運賃は老人はどこまでも一回百円である。一見平凡な句に見えるが、日本の将来を考えさせる、味わい

来る寒さに対抗する若い車夫へのエール。元気のよいリズムが心地良い。

和江 選

斑鳩の小さき塔の受く冬日

兵十郎

振り売りの声のびやかや冬日和

瑛三

きつぱりと大樹の陰に花八手
目立たなかつた八手、白い花が咲きその存在を。

邦夫

・雨やどり事はそこから初時雨 恵子
時雨と雨宿りはセットになるくらいよく詠まれる。しかしこの句は中七に俳句ではあまり見られない言葉をもつてこられ、その含みのある表現によつて、想像の広がりのある句にされた。

互選三句

朱美 選

どこまでも歩け吾が脚木の葉髪

輝子

足早に橋の上ゆく初時雨

眞知子

葉の蔭の己が世界や花八手

盛雄

大きな葉の蔭で次々と形を変えるのを楽しむ八手の花。

安廣

遊ばむと生まれし子らよ冬日和

遊子

本当にめえと鳴く山羊冬日和

幹三

何ともものどかな一句。こんな句が好き。

邦夫 選

冬日差し畠を這ひて襖まで

眞知子

瑛三 選

コロコロと笑ふ声あり花八手

恵子

女医米寿カルテは手書き木の葉髪

幹三

本当にめえと鳴く山羊冬日和

とぼけた感じが面白い。計算された句とも。

恵子 選

髪形を如何に変へても木の葉髪

暁子

車夫若し走れ嵐山初時雨

輝子

初時雨あの日の君よ蛇の目傘

眞知子

遠き日の想い出、蛇の目傘が絵のよう浮かびます。

安廣 選

花豆を煮るやことこと初時雨

和江

晴れた日はぽんぽんはづむ花八つ手

太美子

尾根越の一気呵成や初時雨

兵十郎

急にやつて来た時雨の様子が実感をもつて感じられる。

遊子 選

木の葉髪変わらないねと言はれても

堯子

濡れて行かうかカフエに寄ろか初時雨

瑛三

初時雨成すべきことのあれやこれ

乱

成すべき課題気になりつつ初時雨の候になつてしまつた。

乱 選

悔やむ事二つ三つあり木の葉髪

安廣

コロコロと笑ふ声あり花八手

恵子

存在の頼りなき日々木の葉髪

眞知子

木の葉髪に在る無常。「存在」なる語が哲學的。

駅までを遠回りする冬日和
振り売りの声のびやかや冬日和
花豆を煮るやことこと初時雨
黒き衣に白く短き木の葉髪
幼な児を抱へ小走り初時雨
冬日和奪はれし身の置きどころ
うつし絵のほほゑみは永遠木の葉髪
花八手となりに誰か客のあり
尾根越の一気呵成や初時雨
冬木立遠くに望む佐和山城
傘寿すぎ忘却しきり木の葉髪
若き日の夢ウイッグに木の葉髪
冬日和阿蘇路にけむり吐く高さ
山も野も模糊の中なり初時雨
積読の増ゆるにまかせ獺祭忌
裏木戸に手とも顔とも花八手

参加者自選句

朱美
瑛三
和江
邦夫
恵子
堯子
太美子
輝子
兵十郎
茉衣
翠
眞知子
盛雄
安廣
遊子
乱

即吟

秋から一足飛びに冬がやつてきました。

今月は、今盛りの石蕗の黄色い花と、実がたわわについた槐（えんじゅ）の一枝が飾られました。石蕗の花は十一月の季題ですが、槐の実は歳時記には載つていらないという事でした。しかし、「来年にはきっと歳時記に掲載される」ということを信じて、即吟に挑みました。

透明の莢に眠れる槐の実

暁子

葉と共に光り輝く石蕗の花

邦夫

えだまめのようだねといい槐の実

恵子

槐の実初めて見たる句会にて

堯子

手入れよき庭の面影石蕗の花

太美子

実の透けて見ゆる槐をまじまじと

輝子

鬼の棲むてふ槐木の実落つ

兵十郎

庭の様子と異なる卓の石蕗の花

茉衣

花のこと忘れてしまふ槐の実

幹三

槐の実星の降ること句座にあり

安廣

むべなるかな黄蝶の愛づや石蕗の花

乱

ひとこと

山田安廣

秋から冬へと急展開の昨今です。前回見学者として参加された山川正彦氏は残念ながら不参加という事になりました。皆様方引き続き新人開拓にご協力の程お願い致します。

乱さんから二五年一月の例会の前に新年会を開催する旨の報告がありました。参加費は三、二〇〇円ですが、一人でも多くの方がご参加下さいますようお願い申上げます。

フリートーキングでは幹三さんから、初時雨と時雨は違う。初時雨には「ああ、この季節になつた!」という特別の季節感が有る。これをうまく表現する事が好ましい、という興味深いコメントがありました。

合同句集への投稿要領を別途メールさせて頂きました。是非ご精読下さい。